

私の旅史③【ナイスミドル編】



2021年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

私は旅のチカラ研究所を設立するまでは旅行記を残していない。そこで研究所設立の59才までの私の旅の歴史を「私の旅史」として残すことにした。それは「夢多き青春編」、「新婚子育て編」、「ナイスミドル編」として、旅という切り口で半生を振り返る。

この「ナイスミドル編」はいわゆる中年と呼ばれる40代、50代で、章立ては40代の国内旅行、海外旅行、50代の海外旅行、国内旅行とし、その後につながる第五章もある。

第一章 旅が変わった40代の国内旅行

■40才は人生の折り返し

私が気に入っている話の中で、人の一生を一日の活動に置き換えるという話がある。

それは生まれた時を夜中の0時として80才を24時とする。朝6時は20才で日が昇る頃で、自立する頃、9時は30才でウォーミングアップも終わりいよいよ本格的に仕事が始まる。12時が40才、仕事が終わる18時は60才、定年退職になる。その後から24時に寝るまでは、一杯やるか、趣味に興じるか、家でくつろぐか、これは定年後に何をやるかになる。

この話で40才は正午の12時で、人生の折り返し点になる。そして昼から夕方までは一日で最も活動的な時間帯で、それが40代、50代になる。

私の場合では、40才の時は既に下の子供も小学生になっており、少しは手が掛からなくなってきた。子供は小さい時ほど手が掛かり、大きくなるにつれて手が掛からなくなるが、その代わりに金が掛かると言われている。40才という年齢はその分水嶺のような年齢で、子供にあまり手が掛からなくなると旅のスタイルも変化し、それは旅のバリエーションも増えていくことにもなる。

仕事でも中間管理職になって、大きなプロジェクトを任されてプレッシャーも相当なものだった。会社でも家庭でも地域社会でも最もアクティブな頃で、今考えると忙しいが充実していた。

■極寒キャンプ始まる

30代の終わり頃から世の中ではオートキャンプがブームになり、猫も杓子もキャンプをするようになってキャンプ場が混雑していった。私はその混雑が嫌でキャンパーがいないキャンプ場を目指すようになっていったが、仕事も忙しく自分の都合だけで休暇を取るのもままならず、週末の2日間という限られた日程では遠方には行けない。従ってキャンプに行く時季を夏から秋にシフトしていった。

会社の友人たち、それは同年代のおじさん連中だが、彼らと9月の西湖、10月の本栖湖、11月の山中湖などに行った。夏ほど混雑はしていないものの、それでも多くのキャンパーがいた。ただ夏のキャンプのようにキャンプ初心者は少なく、キャンプ場の雰囲気は夏とはだいぶ異なっていた。キャンプの達人や常連が多く、ギター、バンジョー、フィドル（バイオリン）などの楽器を持ち込んでカントリーウエスタンの演奏を楽しむキャンパーたちもいた。

秋のキャンプは気候も良く紅葉も綺麗で食べ物も美味しいので、一般的にはそのまま秋のキャンプを楽しむのだが、私たちはもっと人がいないキャンプを目指した。

もうキャンパーはいないだろうと思って行ったクリスマスの本栖湖のキャンプ場は、カップルが何組もいて聖夜の夜をよろしくやっていた。そういうキャンパーに人気があった車はスバルの「レガシー・ツーリングワゴン」で、車の屋根に小さなクリスマスツリーを置いてお洒落にクリスマスを楽しむカップルもいた。

これにはおじさんたちは怒った。

いや怒るのは筋違いだが、半分は嫉妬で半分は目論見違いで憤慨した。もはや人がいないキャンプ場はないのだろうか。

そして思いついたのは、かつては夏に行っていた猪苗代湖だ。昔と違って高速道路が整備されて猪苗代湖には比較的簡単に行けるようになっていた。私が40才目前の1995年2月、猪苗代湖畔の雪の中でのキャンプに行った記録が残っている。

もちろん他にキャンパーはいなかった。完全に貸切り状態、というよりも閉鎖中のキャンプ場で勝手にキャンプしていたというものでトイレも閉まっていた。このキャンプがこの後も毎年続くことになる「極寒キャンプ」の記念すべき第一回目になった。

以降ほぼ毎年、極寒キャンプに行っている。自然は気まぐれで吹雪の時も満点の星の夜もある。



【第一回目の極寒キャンプ】



【吹雪の中のキャンプ 雪の壁を作った】

当初は猪苗代湖畔でキャンプをして翌日磐梯熱海の日帰り温泉に立ち寄っていた。何しろ暖をとる焚火の煙の臭いが髪の毛や体に染み付いている。この臭いを落とすため入浴は必須だった。

数年してからは日帰り温泉ではなく翌日に温泉旅館にもう一泊するスタイルになった。自分たちで料理を作る極寒キャンプの翌日には、上げ膳据え膳の豪華な料理を味わう温泉旅館に宿泊するというので、地獄から天国を体験することになる。振れ幅がとても大きくなり、より大きな感動を得ることができる。

おっと、一言断わっておくと極寒キャンプは決して地獄ではない。寒いといっても凍えることはなく、焚火で暖をとりホットワインを飲むので体の内外から温まる。寝る時はダブルシュラフ（寝袋の二重化）で決して寒くない。地獄という表現は正しくないが、翌日の天国との対比を強調するためにあえて地獄という文言を使った。実際はかなり快適なキャンプで、最近では冬のキャンプもブームになっている。快適に過ごすポイントは装備や準備にかかっている。

キャンプの後の温泉はいろいろな温泉地に行ったが、福島の高湯温泉が多い。その中でも安達屋旅館、吾妻屋旅館はお勧めだ。

極寒キャンプは現在のところ 2030 年まで実施する予定にしている。これは何事にも目標を持ちたいということで当初はだいぶ先と思っていたが、実のところ残り 10 年もない。

40 代はキャンプの時代で、冬だけではなくオールシーズン行くようになった。その頃数えた生涯キャンプ宿泊数が 300 泊くらいだったので、現在は 350 泊と言ってもいいかもしれない。

■ キャンピングカー体験

キャンプのバリエーションを増やそうという気持ちと、かつて購入を真剣に考えていたキャンピングカーの旅をどうしてもしたくてキャンピングカーをレンタルする旅を思いついた。

キャンピングカーはキャンプの延長かと思っていたが、それは似て非なるものだった。

1996 年 6 月、家族 4 人で北海道をキャンピングカーで旅をした。4 日間という短期間ではあったが、40 才の私にとっても感動的な旅でももちろん小学生の子供たちは大喜びだった。

飛行機で千歳空港に行きキャンピングカーを借りあとはフリーというシンプルなもので、費用は 4 人分の航空券とキャンピングカーのレンタル代合わせて 20 万円程度だった。

キャンピングカーは米国フォード社製の左ハンドルで車体も大きかったが、そこは広い北海道なのでそんなに苦労しなかった。設備は豪華で 6 人分のベッド、シンクが 2 つ、コンロが 4 つ、トイレ、シャワー、冷蔵庫、エアコン、ファンヒーターも付いていた。食器や寝袋も用意されていたのでコテージ泊と同じ感覚で泊まることができた。



【キャンピングカーの外観】

宿泊地は層雲峡キャンプ場、朱鞠内湖キャンプ場、芦別キャンプ場、6月の北海道の観光客はまだ少なく、キャンプ場も空いていた。夜は冷えたがそれでもファンヒータの威力は絶大で車内は十分に暖かかった。

まだ雪のある大雪山の黒岳に登った。頂上は標高1984mで途中までロープウェイで登れるが、それでも700mくらいの標高差を登るのでいい運動になった。そして家族での登山はこれが初めての経験だった。

芦別にある「赤毛のアン」のテーマパーク「カナディアンワールド」にも行った。赤毛のアンは娘が大好きでアンの子供の前で写真を撮ったが、この20年後に本場カナダのプリンスエドワード島でも同様にアンの子供の前で写真を撮ることになる。

赤毛のアンは作家モンゴメリーの小説なので、そもそも実在していないので生家は存在しない。

昼間は観光や登山を楽しんで夕方にスーパーマーケットで買い物をして、夕食は車内でご飯を炊いて新鮮な北海道の魚をさばいて刺身で食べることも、あるいは肉を焼いてステーキを食べることもあった。もちろん冷蔵庫にはビールやワインが冷えている。朝食はパンとスープ、サラダやコーヒーも付けた。昼食は食堂に入って北海道ならではの海鮮丼や味噌ラーメンを食べた。

キャンピングカーは寝ることと食えることについてはコテージに似ているが、景色の良い好きな場所に車で移動できる。風呂は温泉が多い北海道なので立ち寄り湯を楽しむ。テントの設営や撤収作業がないので時間が有効に使えて、居住空間としては快適である。移動中も退屈することなく、子供たちは運転席の上にあるバンクベッドで景色を見て楽しみ、後ろにも大きな居住スペースという遊びの空間があるので決して飽きるとはなかった。



【キャンピングカー内部のリビングルーム】

キャンピングカーの旅は、キャンプとコテージとドライブ旅行のいいところ取りをしたようなものだが、単純にそれらを合わせたというのではなく全く異次元のものだった。いずれにしても私が今まで体験したことのない世界だった。

今思うと、異次元になった理由はやはりキャンピングカーの大きさだったのかもしれない。昨今は日本の国土事情に合った小さいサイズのキャンピングカーが多くなっており、中には軽自動車のキャンピングカーもある。

最近のことで、友人が所有する国産車のキャンピングカーに乗せてもらったが、とても異次元には感じられなかった。

■大人数で行く保養所

キャンプと並んで相変わらず会社の保養所を利用した旅を楽しんでいた。この頃は両親以外に親戚一同など大人数で行くパターンも増えていた。

1991年11月、私たち家族の他に群馬県に住む私の両親、妻の両親、妻の兄夫婦、甥たち、妻の兄嫁の父親まで、総勢11名で群馬から越前の保養所に行った。

この保養所ではこの時季にズワイガニグルメツアーというのをやっており、ズワイガニをふんだんに使ったフルコースを楽しむことができた。私はそれ以前にこのズワイガニグルメツアーを経験しており、群馬県に住む両親や親戚にもこの豪華なズワイガニのフルコースを食べてもらおうと企画した。

私の知っているあらゆるカニ料理が出てきた。これには親戚一同度肝を抜いたようだった。



【ズワイガニのフルコースの最初の膳】

1995年に7月に父が他界した。享年77才だった。

その喪が明けて9月に母を元気づけるためと敬老の日イベントを兼ねて私たち家族と母、そして母の妹、母の弟夫婦の8人で、蔵王の保養所に行った。山形はちょうど芋煮会の季節なので料理には名物の芋煮が出てきた。料理も保養所も評判が良く、行った甲斐があった。

1997年7月に親戚18人で新潟県石打の保養所に行った。私たち家族と私の母以外は妻側の親戚が13人もそろった。この時に撮った集合写真を義母は大そう気に入っており、今も額にいれて飾っている。義母が言うにはこのような親戚一同の旅は極めて珍しい、いや後にも先にもこれ一回だけだと言っている。



【新潟の石打の保養所】

1998年5月、私たち家族と母と義父母の7人で、関西と四国の保養所巡りの旅をした。群馬を出て大阪の保養所、明石海峡大橋から淡路島を通り大鳴門橋で四国に入った。高知の桂浜を見て本場でカツオのたたきを食し、道後温泉の保養所、瀬戸大橋を渡り京都嵐山の保養所に泊まった。

この旅で四国の4県を訪れたことによって子供たちは日本全都道府県制覇を達成した。この時娘は14才、息子は9才だった。当人たちの意思ではないが、一つの勲章になったに違いない。

以降も保養所は多く利用した。親戚以外に、学生時代の友人、近所の人たち、会社の仲間、仕事で知り合った人たち、私が仕事で月一回会議に出席していた画像電子学会の人たちとも行った。

■家族で冬の北海道

1997年2月、家族で冬の北海道に4日間旅行した。往路は鉄道を利用したが、当時の東北新幹線は盛岡までしか開通しておらず、札幌までは長い道のりだった。青函トンネルは長さ54km、当時世界一で、それを子供たちに体験させることも旅の目的の一つだった。

札幌では友人宅に2泊させてもらい札幌雪まつりを見物した。その友人というのは、私の友人ではなく妻や子供たちの友人だった。この家族と私たち家族とは家族構成と年齢が同じで、娘同士も息子同士も同学年、親たちも同年齢、たまたま近所に住んでいたのを知り合いになった。その友人一家が一年前に札幌に引っ越したので、再会と札幌雪祭りが旅の前半の目的だった。

後半は列車で網走に行き観光砕氷船ガリンコ号に乗り、網走の「流水祭り」を見た。小さな祭りだったが、その手作り感がとても心地よく札幌雪祭りよりも私の心に残っている。

氷像が展示だけでなく、魚介類や牛肉のBBQ、手作りの氷のグラスに入ったワインなども全て無料でふるまわれた。キャンプファイヤーを囲んで地元の人たちが先住民族のアイヌの衣装で輪になって踊って、そこに観光客も私たちも加わって踊った。全く予期していない料理や演出に感激し氷点下の夜の祭りを楽しんだ。

帰途は家族では初めての夜行寝台列車で札幌に戻り飛行機で帰宅した。また一つ旅のバリエーションが広がった。



【手作りの氷のグラス】



【キャンプファイヤーを囲んだ踊り】

■家族で登山

私は生まれ育ちが群馬県なのでそれなりに山に登っていたが、家族一緒となると北海道キャンピングカーの旅で大雪山の黒岳に登ったのが最初の家族での登山になった。

私が 40 代後半に差し掛かった頃には子供たちが高校受験や大学受験の年齢になり、その受験に際して願掛けのために“挑戦して達成する”との思いを込めて家族で登山をするようになった。それは入試の前年の夏に行われて、数回実施された。



【谷川岳山頂 トマの耳】

1999 年に神奈川県の大山の日帰り登山を皮切りに、2002 年夏には群馬県の谷川岳に登り草津温泉に泊まった記録が残っている。津軽富士で名高い青森県の岩木山にも登った。いずれの山もケーブルカーやロープウェイで頂上近くまで行ける、それに夏なのでそんな大袈裟な登山ではなかった。

それでも登頂による達成感が自信につながって願掛けには良かったかもしれない。

■ゴルフ

2002 年、46 才の私はゴルフを始めた。中高年でゴルフを始めた人のベストスコアは開始年齢の概ね 2 倍と言われており、私の場合は 92 のはずだが、現在までのベストスコアは 83 だ。

私とゴルフとの出会いは当時の上司から「植木もそういう役職になったのだからゴルフを始めろ」といつも言われていた。ある時「今度の社内コンペに申し込んでおいたぞ、俺のクラブが車のトランクに入っている、それをやるから練習しておけ」と上司の車の鍵を受け取ったことから始まった。この上司には今でも本当に感謝している。そして私はゴルフにのめり込んでいった。

ゴルフは私の運動習慣や人間関係などを大きく変化させた。

ゴルフコースの広い緑の芝生を歩き、グリーン上で談笑するというのが、私や多くの人が抱いているゴルフのイメージで魅力でもある。確かにそれは大きな魅力ではあるが、私にとってゴルフコースだけではなく、練習にも魅力を感じた。あまり運動をすることがなかった私だが、頻繁に練習場に通うことになった。練習場では自分の創意工夫や努力によって腕前が上達していくのが実感できて、最終的にはコースに出てスコアという形で数値化される。

ありがたいことに練習は自分の都合でできる。練習場は朝から晩まで場所によっては 24 時間、雨が降ってもやっている。野球やテニスのように天候に左右されずに練習相手を必要としない。

人間関係は確実に広がった。今まであまり付き合いのなかった友人や知人ともゴルフを通じてより親しくなった。あるいは初対面でも一緒にコースを回れば比較的簡単に打ち解けることができた。接待ゴルフが有効な理由はととても良く理解できる。

ゴルフは日帰りが圧倒的に多いが、宿泊を伴うゴルフ旅行というのものもある。ゴルフ場併設のロッジに泊まることもあれば、ゴルフと温泉旅館、ゴルフ目的の国内外のツアーも多い。

2006年、50才になった私は「伊豆にらやまカントリークラブ」の会員権を購入した。このゴルフ場は伊豆半島の付け根付近の静岡県伊豆の国市、葦山反射炉の近くにある。頻繁に行くようになったので私にとって伊豆はかなり身近に感じるようになった。

■温泉の旅

それまでの私は、どこかに行った時にたまたま温泉宿に泊まる程度のもので、温泉は二次的なもので主目的ではなかった。

2000年を過ぎた頃から夫婦二人で行く温泉の旅が多くなってきた。それは歓楽街のある大きな温泉地ではなく、山奥にある秘湯の宿を選んで泊まるようになった。そんな秘湯の宿に泊まると「日本秘湯を守る会」と書かれた大きな提灯が目にとまった。

日本秘湯を守る会とは1975年に朝日旅行が始めた会で、この頃は156軒の宿が会員になっていた。



この会の宿に泊まるとスタンプを押してもらえる。それが10個になるとスタンプが押された宿の中で好きな宿に無料で宿泊できるという特典がある。この無料宿泊を夫婦で3回したので、この会の宿に都合30泊以上したことになる。

この会の宿は、一定のレベル以上で比較的当たり外れがない。秘湯初心者にはお勧めだが、秘湯マニアには物足りないかもしれない。秘湯中の秘湯の宿はこの会に入っていない場合が多く、脱会した宿もある。

【幕川温泉水戸屋旅館 日本秘湯を守る会の提灯】

この30泊がきっかけで私は温泉好き、特に秘湯好きになっていった。しかしちょうどその頃世の中では秘湯ブームが到来しており、上手く乗せられたのかもしれない。

秘湯以外の温泉も多く行った。印象に残ったものが2件ある。

2002年7月、草津温泉に行った。草津温泉には何度も行っていたが、この時のメンバーが強烈だった。同じ会社の仲間7人で、この中の女性2人が呑み助、いや女性だから呑む子か。とにかくさん飲む。一人は立膝をついて日本酒を飲み、もう一人はビールならば底なしの胃袋を持っていた。この会を「怖いもの見たさの会」と呼んでいたが、男も含めて酒呑みばかりだった。

ペンションに泊まり“温泉合宿”が行われた。その実態は“呑み合宿”だったかもしれない。

草津温泉には18カ所の共同浴場があり、私たちはその全てを2日間で制覇した。18カ所も入るとビールがより旨くなるのも狙い通りかもしれない。

共同浴場制覇によって私はより一層草津温泉が好きになった。草津は温泉と住民と観光客とが見事に調和しておりそのような温泉地は全国でもあまりない。共同浴場は完全に地元住民の生活と一体化しているので、住宅地の中に普通の民家のように存在する共同浴場もあって場所探しに苦労したことを覚えている。

2004年、娘が北海道大学に入学したので家族で北海道を訪れた。そして以前から行きたかった登別温泉の第一滝本館に泊まった。この宿の「温泉天国」という大浴場がとにかく凄いと聞いていたからだ。そしてそれは本当に凄かった。息子は私に向かって「大変だ！このお風呂には終わりが無い！」と叫んできた。

湯船の数が35もある。それも一つひとつの湯船の大きさはちょっとした旅館の大浴場くらいある。湯船の数や広さはもちろんのこと、温泉の源泉も多い。日本の温泉は10種類の泉質に分類できるが、ここだけでその半分の5源泉を体験できる。さらに露天風呂の一角には生ビールや冷酒を提供するカウンターまである。もちろん現金ではなく部屋付けで飲める。これはたまらない。

■日本最南端へ

2005年2月、私は貯まっていた航空会社のマイルを使って沖縄石垣島まで妻と1泊2日の旅に出た。私の航空運賃はマイルを使って無料になり、同行する人は日本中どこでも往復1万円という大変お得な「おともでマイル」という制度があった。そのために夫婦合わせて1万円で羽田から石垣島まで往復できた。今でも同様な割引制度は残っているが、この時が最もお得だった。

石垣島ではレンタカーで島を一周し、有名な下平湾などの観光スポット、焼肉やソーキそばも食べた。竹富島にも渡り、この島独特の雰囲気を楽しんだ。私にとって学生時代以来、2回目の石垣島、竹富島だが、妻は初めてなので綺麗な海と島民の素朴な暮らしに感動していた。

石垣島から南へ高速船で約1時間、人が住む島では日本最南端の波照間島に渡った。この島は南十字星が見えるというほど南にあり、とにかく海が綺麗な島だ。人口約500人、周囲約15kmという小さな島なので比較的簡単に一周できるのだが、時間もなく最南端の碑の前で写真を撮って戻って来た。



【石垣島 下平湾】



【日本最南端平和の碑】

島内で唯一の酒造所があり、「泡波」という泡盛を造っている。泡盛は米を原料にして黒麹で発酵させた蒸留酒いわゆる沖縄の焼酎だ。この焼酎は滅多に飲めないのが幻の焼酎と呼ばれている。基本的には島内で飲む分だけ造るようなので島外では入手が極めて困難な焼酎だ。小さなペットボトル入りの泡波を買ってきたが非常に飲みやすかった。これは人気があるはずだ。

■嫁と姑の旅行

群馬の実家で一人暮らしをしていた母が 80 才になったのをきかっけに、神奈川に呼び寄せて同居することになった。妻は姑との同居に際して、嫁と姑の二人だけで旅行に出た。介護の仕事をしていた妻にとって、きっと何か思うところがあったのだろう。

2005 年 5 月から同居が始まり、その 5 月に北海道、そして 12 月には南九州へ行った。私は同行していないのでこの旅行の中身は分からないが、これには頭の下がる思いであった。私の旅の歴史に刻む価値があると思った。

第二章 40 代の海外旅行

■シンガポール

1996 年 1 月に、シンガポールを旅行した。残念ながら私の父はこの前年に亡くなっており、メンバーは私たち家族と私の母、義父母の 7 人の旅になった。父が亡くなって一人暮らしになった母を元気づけることも目的の一つだった。この時 70 才の母が生まれて初めての海外旅行で、私は初めて親と一緒に海外旅行に行けることが嬉しかった。

シンガポールの市内観光は有名なマーライオンだ。マーライオンはベルギーの小便小僧、コペンハーゲンの人魚姫の像と並んで“世界三大がっかり”の一つになっているが、当時の私はそう言われていることさえ知らなかった。島全体が総合リゾート地のセントーサ島を楽しんだ。現在のセントーサ島に大きなマーライオンタワーが建っているが、この時は建設中だった。



【マーライオンをバックに 7 人で記念撮影】

路線バスに乗って隣国マレーシアのジョホールバルにも足をのぼしたが、帰りのバスに乗ろうとしたら降車したバス停では乗車できず、バスターミナルは移設されていて見つからずに難儀をしてした。何しろ 70 才の年配者 3 人、小学生 2 人を連れた旅なので歩いて帰ることもできず、苦慮していたが親切な地元の若い女性 2 人組に救われた。タクシーを拾ってくれて彼女たちも乗って 2 台でシンガポールまで戻ってきた。それは本当にありがたかった。困っている外国人には親切にするものだということを心の底から思った。

この旅では義父のテンションが高かった。シンガポールは第二次世界大戦開戦して間もない 1942 年 2 月に日本陸軍が進駐し、昭南島（しょうなんとう）と呼ばれた。それは昭和の時代に得た南の島という意味らしい。

義父は戦争でシンガポールに来たことはないが、陸軍への入隊経験があったので当時のことを熱く語ってくれた。おそらく遠い異国、それも昭南島に来て感じるものがあったのだろう。いつもは紳士的で理性的な義父だが、違う一面を見たような気がした。これもまた旅のチカラなのだろうと当時思ったことを覚えている。

■タイ

1998 年 8 月、タイのバンコクに 4 日間の家族旅行をした。この旅は往復のフライトにホテルがついたシンプルなものでも一人 5 万円を切っていた。

中華航空を利用したので台北経由でバンコク入りしホテル日航に泊まった。当時の中華航空は世界でもかなり評判がいい航空会社で、ホテル日航ももちろん立派だった。

金色の寝釈迦で有名なワット・ポー、エメラルド寺院と呼ばれるワット・プラケオ、王宮、快樂街のパッポン通、民俗舞踊も見た。



【タイの寺院 ワット・プラケオ】

旅行マニアにとってバンコクといえばバックパッカーが集まるカオサン通りが有名で、いろんなものが安く売っている。私は掘り出し物を期待して行ったが、やや期待外れだった。

タイと言えばアユタヤ遺跡が有名で、バンコクから北へ約 80km の距離にある。私たちも行くとしていたがタクシーが法外な値段を吹っかけてきて、しかもしつこいので多少の身の危険を感じてやめにした。

今思えば鉄道など別の手段で行くべきだったと後悔している。やはり「旅は行ける時に行く」だろう。

■スペイン

1998年12月、私が42才の時の年末年始に私たち家族と私の母、義父母の7人でスペインを旅行した。

3年前にシンガポール旅行と同じメンバーだが、3年前と大きく異なる点は母と義父は体に不安を抱えていた。2人とも見た目は普通に見えるが、母は心臓にペースメーカーを入れたので近所に住む母の友人たちから旅行の誘いがなくなっていた。義父は右半身の痛みを伴ったマヒが発生しており見た目が元気そうだが、肩に触れただけで激痛が走り人生の楽しみを失いつつあった。

もちろん2人とも最初は旅行に行くのを躊躇していたが、双方には「向こうのお父さん（お母さん）も行くのだから大丈夫だよ」と説得して3カ月前に予約した。それでも義父は1カ月前に「やはり心配だから、やめたい」と弱音を吐いてきたので「何かあっても僕たちが何とかするから」となだめて再説得した。

12月29日出発の前日の夜に義父からまた電話がかかってきてキャンセルしたいと言ってきた。私は「今日キャンセルしても明日しても同じなのでとりあえず成田まで行きましょう」と再再度の説得をした。説得という何か理屈があるようだが、理屈は無く、もはや騙して連れて行くと言っても過言ではなかった。そして当日、成田まで来たので半分は諦めの境地だろうか、何とか行く気になってくれてスペインに向けて飛び立った。

旅行はスペインを時計回りにバスで周遊する添乗員同行の8日間のパックツアーだった。その行程は1日目エールフランスにてパリ経由でバルセロナ泊。2日目バルセロナ、タラゴナを観光し、バレンシア泊。3日目はドンキホーテで有名なカンポ・デ・クリプターナを見てグラダナ泊。4日目はアルハンブラ宮殿、ミハスの白い村を見て、夜はセビリアでフラメンコショーを見てセビリア泊。5日目はコルドバ観光後、スペイン高速鉄道AVEに乗ってマドリッド入り、マドリッドで2連泊。7日目にパリ経由、機中泊で帰国した。

私にとっても初めてのスペインで、中でもバルセロナの芸術家ガウディが作ったグエル公園やサクラダファミリアだろう。本場のフラメンコショーも良かった。マドリッドの駅は植物園のようだった。

メンバー全員は海外で迎える正月が初めてで、思い出残る旅になったに違いない。何とか無事に7人の珍道中を終えることができた。



【カンポ・デ・クリプターナ 1月1日】



【マドリッドの駅構内】

この旅によって体に不安のあった 2 人の人生は大きく変わった。

母はヨーロッパに行ったということで自信がついて、その実績で周囲の友人たちも旅行に誘ってくれるようになり、以後 2 回も友人たちと海外旅行に行った。

義父も勇気や自信が出てきたのだろう積極的に旅行や各種活動に出かけるようになった。それでも晩年になって体の自由が利かなくなるとして自宅にこもるようになったが、私がスペイン旅行で撮っていたビデオを毎日見ていたという。あるいはスペインのテレビ番組があれば必ず見て、あの時に無理しても行ってよかったと回想していたという。義父が亡くなって 8 年経つが、義母は今でも「あのスペイン旅行に行って本当に良かった」と話してくれる。

私は、旅は若者に夢や希望を与えるもので、ある意味若者の特権かのように思っていた。それは単なるイメージで、偏見でしかないことだと痛烈に感じた。年老いても旅は勇気や希望を与えてくれるということ、いや年老いたが故に旅のチカラは大きな作用があると痛感した。このことは旅のチカラ研究所設立に大きな影響を与えた。

この旅も私の好きな言葉のひとつで「旅は行ける時に行く」を実践した結果だった。それは意識的に“行ける時”にすることが重要で、自分のできる範囲で創意工夫することだろう。

■地球計画

2000 年 8 月、私が 44 歳の時にアメリカ合衆国とカナダ、そしてカリブ海のバハマに家族 4 人で 12 日間旅行した。

この旅は当初は「地球計画」という名前だった。その名のとおり世界一周計画で、学生時代に企画したシベリア鉄道・モンブラン登頂・シルクロードをジープで帰国するという大計画が日本一周になったのと同じように計画縮小になったが、私も旅慣れており実現性は高かった。

当初の地球計画は飛行機の世界一周チケットを使って期間 3 週間、費用は 4 人で 200 万円を想定していたが、諸事情によりどちらも約半分になってこの北米旅行になった。

しかし今でも私はこのチケットで世界一周をする夢を捨てきれていない。

世界一周は諦めたが、憧れのカリブ海のクルーズを取り入れニューヨークを拠点にアメリカ合衆国を体験する計画にした。もちろん個人旅行での手配だった。

私はその前年に出張でニューヨークを訪れていた。私の持論で世界を制した国の首都に行くことの重要性を強調していたので家族に現在の世界を動かしているニューヨークやワシントン DC を見せてあげたかった。幸いにしてニューヨークには駐在員が住んでおり、彼やその友人たちと仲良くなっていたのもこの計画に落ち着いた理由だ。

まずは日本からシカゴ経由でフロリダに飛び、クルーズ船「マジスティ・オブ・ザ・シーズ」に乗船して 5 日間のカリブ海クルーズを楽しんだ。1994 年の「ゆとりっちクルーズ」で乗った日本船「おりえんと・びいなす」は 2 万 3 千トンだったが、今回の船は 7 万 4 千トン、いかにもアメリカ合衆国というスケールだった。約 2000 人の乗客のうち日本人は私たち家族含め 8 人と極少数で船内放送は英語とスペイン語ということにも苦勞した。

乗船歓迎イベントでは広いデッキいっぱいに乗員総出のダンスで盛り上げ、とにかく乗客も乗員もひたすらに明るかった。

料理は各国料理が日によって替わり、その演出も凄かった。例えばイタリアンの日にはイタリア国旗の3色の衣装を身につけたウエイターたちが、大きな声でカンツォーネを歌いながらレストランに入場してくるという演出だった。やはりエンターテインメントの国だと痛感した。

このクルーズ船の会社がカリブ海の無人島を所有しているの、沖合に船を停泊させて無人島に渡ってプライベート・ビーチで思いっきりリゾートを楽しんだ。その時にコックとウエイター、バンドマンも一緒に上陸したので、生バンドによる本場のレゲエ音楽をバックに、BBQでプロの料理人が焼いた分厚いステーキを上げ膳据え膳で食べるという信じられない体験をすることになった。もちろん目の前にはエメラルドグリーンのカリブ海が広がり、足元には真っ白な砂浜、そこにカリブの太陽が燦々と降り注いでいた。これには本当に恐れ入ってしまった。



【マジェスティ・オブ・ザ・シーズのデッキ】



【カリブ海の無人島】

ニューヨークでは駐在員の友人が経営している宿に泊まった。この宿はご飯に味噌汁という朝食付きの宿で、いわゆる B&B (Bed & Breakfast) の宿でそこを拠点に数日間行動した。宿の裏はニューヨーク特有のちょっと汚いが活気のある裏路地があって、宿の裏庭でビールを飲んでいるといかにもニューヨークに来たという感じのする宿だった。その経営者の友人とは一年前の出張時に知り合っており、日本人なので言葉の面でも心配なく色々面倒を見てくれた。

実はニューヨークの JFK 空港に到着した際に人生初のバゲッジ・ロスを体験した。飛行機に預けた私たちの全ての荷物が紛失し、この荷物が私たちの手元に届くのに2日間もかかった。この時の航空会社とのややこしい交渉をその友人がやってくれた。荷物が届かないから予約してあるブロードウェイの公演に行けずにチケットが無駄になるとか、あの手この手で好条件を引き出す交渉をしてくれた。こんなことまで要求できるのかと、私にはいい勉強になった。

ナイアガラの滝を見物するためにバッファローまで飛行機で行き、タクシーでナイアガラまで行ってアメリカ滝を見て、より大きいカナダ滝を見るために生まれて初めて歩いて国境を越えた。当然のようにナイアガラの滝の大きく強烈だった。今さらながら日本とアメリカ大陸とのスケールの違いを実感した。

ニューヨークは地下鉄を駆使して有名な観光スポットを巡った。その時の写真の中には翌年の2001年に発生する9.11テロで破壊されたワールドトレードセンターも写っていた。

ニューヨークを拠点に首都のワシントンDCまで鉄道「Amtrak」に乗って行った。私は昔からAmtrakに憧れており、名前の由来のAmericaとTrack（線路）の合成語も好きな理由だが、何よりも大きくてがっしりした車体がいかにもアメリカ大陸を横断するイメージが好きだった。



【ワールドトレードセンターと子供たち】



【Amtrakと妻と子供たち】

最後の夜はニュージャージー州の駐在員の家に泊めてもらった。ニュージャージーはニューヨークの隣なのでニューヨークにも簡単に行け、ニューヨークほど物騒ではなく土地も賃料も安いので、多くの日本企業が進出していた。

その駐在員の家で私は得意料理の大阪仕込みのお好み焼きを焼いたのだが、当時のニュージャージーにはキャベツがなかった。ソースやカツオ節などは日本から持参したが、キャベツは現地調達の手配だった。代替品としてグリーンボールを使用したけど、それでも味は及第点だった。

■深夜特急

2001年夏、私たちはイラン旅行をすることにした。どうしてイランなどという国に行くことになったのか。

沢木耕太郎の「深夜特急」という作品がある。彼はノンフィクション作家なので、彼が旅をして実際に体験したことに基づいて書いた旅行体験記になっている。そのためこの作品はバックパッカーのバイブルと言われるほどに多くの若い旅行者に影響を与えた。

あらすじは1970年代前半、沢木耕太郎がインドのデリーからイギリスのロンドンまでを乗り合いバスだけを乗り継いで旅をするという賭けを友人たちした。日本を出てデリーに行く前に香港に立ち寄って東南アジア各地の旅が始まる。これは電車や飛行機を使っている。そしてインドから乗り合いバスの旅が始まり、イランなどの砂漠地帯を抜けて、トルコそして地中海沿岸、大西洋沿いにロンドンまで行った。

実は私が沢木耕太郎を知ったのはこの作品よりももっと早く、私が中学生の時に聞いていたラジオの深夜放送の北山修の「バックインミュージック」に彼がゲスト出演した。ちょうどその旅から戻って来たばかりで、興奮覚めぬ状態でその旅の様子を話していた。

その時代にアジアからヨーロッパに乗り合いバスで行くなど考えられないことだった。その時のエピソードで、まだ幼い少女が売春目的で寄ってきてその値段が 10 円か 20 円だったと、彼はこの切ない現実にも思い知らされたと話していた。もちろんこんな話は深夜特急には出てこない。

この作品が大沢たかお主演でテレビドラマ化され、私が 40 才の 1996 年に放映され、私は 3 回のシリーズを見て虜になった。私がそれをビデオに撮って何回も見ていたので、中学生の娘が深夜特急の本をプレゼントしてくれた。中古の文庫本だったが、実に嬉しかった。

当然のようにこの本が後の私の旅行記に影響を与えたのは言うまでもない。旅行先についても、イラン以外に香港、バンコク、トルコの旅はそれがきっかけになっている。

テレビドラマは全て現地ロケでリアリティがあり、実に良く仕上がっていた。イランの砂漠に夕日が沈む道をバスが走っていくシーンがあった。乗り合いバスなので地元の人々が乗っていて、停留所もない道路で一人降りた老人が砂漠の中を歩いて消えていく姿を大沢たかおのナレーションで「この老人の家はどこにあるのだろう・・・」と語り、BGM には井上陽水の「積み荷のない船」が流れていた。私はこのシーンが私は大好きでイランに行ってみたくて 5 年が過ぎた。

■イランへ

2001 年 8 月、夏休みを利用して家族 4 人で 8 日間のイラン旅行に出た。

最初の驚きはイランのビザを取得するのに父親の素性を細かく明記する必要があり、私の父は既に亡くなっていたが、それでも書き出した。男社会の国だという強烈な印象を私に与えた。

イランは非常に暑かった。世界の最高気温はイランの隣国イラクのバスラで 58.8℃の記録がある。バスラはチグリス川、ユーフラテス川の河口に近い都市で、この 2 つの川の名前から思い出すのはメソポタミア文明で、その文明の流れをくむのがペルシャ帝国つまり現在のイランだ。

この国はイスラム原理主義で、観光客でも女性は肌も髪も出してはいけない。娘はチャドルという黒い民族衣装を買って着た。妻もスカーフで頭を覆っていた。娘や妻に聞くと被り物は意外にうっとうしくはなかったと言っていた。

イラン中南部のペルセポリスの遺跡では気温 50℃もあった。太陽の光が突き刺さるような暑さで、“陽射し”という言葉が非常に良く似合うと感じた。ただ日本のように湿度が高くないので日陰に入ればそれなりに過ごしやすかった。

ペルセポリスはペルシャ帝国の首都で、その大帝国は紀元前 6 世紀頃から 200 年間以上続いて、その勢力範囲はインド西部からギリシャまで及び、アレクサンダー大王に滅ぼされた。



【ペルセポリスの遺跡】

ペルシャ帝国ではゾロアスター教が信仰されていた。ゾロアスター教は紀元前 10 世紀頃には成立していたという世界で最も古い宗教で、現在でも少数ながら信仰が続いている。開祖はゾロアスターという人物で、世界の宗教の源流となったといわれている。

ゾロアスター教の葬儀は「鳥葬」で、それは鳥に死体を食べさせるという驚くべきものだ。その鳥葬が行われていた「沈黙の塔」を見た。もちろん私たちが訪れた当時は使われていない施設だが、上空には多くの鳥が飛んでいて不気味な感覚を覚えた。

イラン国内各地をバスで周遊し、イスファハン、シラーズ、テヘランなどを巡った。都市には緑があるが、都市と都市の間は木のない山々が連なり砂漠の中をバスで走った。残念ながらその砂漠に沈む夕日は見るができなかった。

イスファハンはペルシャ帝国の繁栄から 1000 年以上後の時代で、8 世紀頃から 17 世紀に栄えた街で、いわゆるアラビアンライトの世界だ。その繁栄の規模が、世界中の人や富の半分を集めたといわれていたので「イスファハンは世界の半分」という言葉が残っている。その中心はイマーム広場で、とにかく大きくそして綺麗だった。それにしても世界の半分というのは言い過ぎだろうという声もあるが、私には半分としているのが少し謙虚にも感じられ、その絶妙な表現が気に入ったことを思い出す。



【鳥葬が行われていたヤズドの「沈黙の塔」】



【イスファハンの喫茶店】

話は全く変わって、当時の私は中年真っ盛りの 45 才で、かなり太っていた。ピーク時の体重は 83kg もあって、実は春の健康診断では血糖値が高く再検査を言われていた。再検査は夏休み明け、つまりイランからの帰国後すぐに行われるように決まっていた。

イランはイスラム原理主義なので国民はもちろん観光客もアルコール禁止の国である。イラン航空の飛行機に乗った時からアルコールは一切出てこなかった。この 8 日間の禁酒の効果は絶大で帰国後の再検査で血糖値はかなり下がっていた。改めてアルコールの威力(?)を感じるようになった。

尚、数年して私の体重は 60kg 台になった。これはゴルフと日々のウォーキング、そして少しの食事制限によるもので、決してアルコールはやめていない。

■台湾

この頃から私たちの海外旅行が家族旅行から夫婦旅行に変化してきた。子供たちは学校の用事があって家を離れられず、費用は半分になるのでありがたかった反面少し寂しさもあった。

2002年4月、夫婦で台湾に行った。台湾は親日の国なので安心感があり、日本のアイドルやアニメの人气が非常に高い。その人気と私は何も関係していないのだが、なぜか嬉しく感じるから不思議だ。

人間関係でもそうだが、相手が自分に好意を持っていればこちらも好意的な対応になるが、その反対に敵意を感じれば、それに対抗するようになる。台湾からは好意的な印象をもらい、そして私も良い印象を台湾に残したいと思って旅をした。



【故宮博物院】

台北市内に滞在して自由観光で地下鉄を使って市内散策を楽しんだ。台北は日本語も通じて歩きやすい街だ。

食べ歩きや占いで有名な行天宮や故宮博物院を見て回った。しかし本物の中国の故宮(紫禁城)に比べるとこちらの故宮博物院はさすがに見劣りする。ただ収蔵品の多くは蒋介石が北京から持ち出したものなので、収蔵品は台湾の方が厳選されていた。

最近の話で、友人が台湾を自転車で一周し、その時の感動を話してくれた。特に人々は皆親切だったと言っていたのは印象的だ。

■香港

2003年8月、夫婦で香港に行った。特に予定もなく自由気ままに香港を散策した。

香港は沢木耕太郎の「深夜特急」ではエネルギーな街と描かれていた。私もそのイメージを持って現地に行って、まさしくそのイメージどおりで街に活気があった。

食事はもちろん本場の中国各地の中華料理が集まっているので美味かった。その点は台湾よりも数段上のような気がする。

沢木耕太郎が香港を訪れていたのはイギリスから中国に返還されるかなり前だったが、私たちが訪れたのは返還から6年経過していたが、当時の香港はあまり中国の影は感じられなかった。

最近のニュースを見る限り現在の香港は様変わりして完全に中国政府の統制下らしい。中国政府の支配や影響が強化されていく様を端的に表している「昨日のチベット、今日の香港、明日の台湾」という言葉がある。この3つの地域はそれぞれ事情が異なるが、中国4千年の歴史からすれば、あまり驚くことでもないかもしれない。



【香港の夜 オープントップバスの上】

ここに興味深いデータがある。2019年日本にやって来た外国人旅行者数、いわゆるインバウンドの人数で全体は3188万人、その内訳を見ると中国959万人、韓国558万人、台湾489万人、香港229万人、米国172万人、タイ131万人と続く。

この数字を詳しく見ると中国が1位だが、台湾と香港が意外に多い。私たち日本人から見ると中国人も台湾人も香港人もその区別はつかない。そのために中国系の人を見ると、皆中国本土の人間だという思い違いをしている日本人が多い。

各国の人口を考え合わせるとさらに興味深い。中国は桁違いの14億人、韓国は5170万人、台湾は2360万人、香港は734万人しかいない。人口の少ない台湾と香港から多くの人が来ている。

■カンボジア

2004年12月、私と妻と娘と息子の家族4人でカンボジアに行った。私は44才で、娘は大学生、息子は高校生になっていた。

カンボジアに行って、まず驚いたことは子供が非常に多いことだった。街には子供たちが溢れていたような気がする。現地ガイドがこの当時のカンボジア国民の平均年齢は19.5才だと教えてくれた。その若い理由は独裁者ポルポトによる200万人ともいわれる大虐殺があって多くの大人が殺されたことが大きく影響している。人口が日本のほぼ1/10、つまりおよそ1000万人のこの国にとってはとんでもない数字だ。

子供たちが多く、若いこの国は活気に溢れており、未来は明るいと感じた。

カンボジア観光の目的はもちろんアンコールワットだ。アンコールワットはユネスコの世界遺産の人気投票で常に上位にランクされている。カンボジアの国旗にもアンコールワットがあしらわれている。

アンコールワットはかつての寺院なので境内がある。その境内は東西約 1500m、南北約 1300m、で外周には堀があって堀の幅は 190m もある。当時としては、いや今も相当に大きい。西が正門になっていて、西を向いているので朝日と夕日に映える。そのためにアンコールワットの写真は朝焼けや夕焼けのシーンが多い。建物の構造は中央に高さ 60m に中央塔がある。それを囲むようにやや低い 4 つの塔があって回廊でつながっている。この中央塔に登ったが、これが相当に急な階段だった。登るのはともかくも、降りるのが大変で苦勞したことを覚えている。



【夜明けのアンコールワット】



【アンコールワット中央塔から降りる様子】

カンボジアのほぼ中央にあるトンレサップ湖に行った。この湖の面積は東南アジア最大だが、乾季と乾季でその面積が変わり、雨季には琵琶湖の 10 倍以上になるといふ。私たちが行ったのは 12 月の乾季だが、それでも十分に大きかった。もちろん対岸は全く見えないので海のような感じだ。

水上生活者も多く世界最大規模で 100 万人が住んでいるといふ。カンボジアの人口を考えるとそれは凄く人数になる。その生活スタイルには驚いた。船をつなげただけの家、高床式にしている家、学校や教会も商店も水上にある。この湖での暮らしぶりは、日本では全く考えられない。



【トンレサップ湖の水上教会】

第三章 再び夫婦二人の 50 代の海外旅行

■ベトナム

2007年6月、夫婦でベトナムに行った。私は51才になっており、この頃からの海外旅行は完全に夫婦二人の旅になっていた。

ベトナム南部の都市ホーチミンに滞在して自由観光を楽しんだ。ホーチミンはかつてサイゴンと呼ばれ旧南ベトナムの首都で、そのためベトナム戦争当時の傷跡や戦争関連の博物館などが多くある。またベトナムはフランスの植民地だったので、フランス風の建築物も多い。

街は車よりも圧倒的にバイクが多く、電柱や電線が張り巡らさえて急に近代化が進んだという印象を受けた。

ホーチミンの南方には東南アジア最長のメコン川の河口があり、その一帯はメコンデルタという三角州になっている。このメコンデルタを見るために運転手と日本語のガイド付きで自動車をチャーターした。夕食とジャングルの湿地帯のクルーズも付いて夫婦二人で2万円というリーズナブルな価格だった。いや当時の日本人の感覚では安い、現地の人からすれば高いのかもしれない。

帰りの飛行機からこの一帯を上空から見る事ができたが、緑の大地の中を川が行く先を探して方々に広がっているような光景を見た。これはもはや蛇行とかというのではなく、川が迷子になっているようなものだった。

物価も安く治安も良く、とても居やすい国だった。それは国民性が日本人と似ているからだろう。よく言われるのは人に物をプレゼントする時「つまらないものですが」と言うのは日本人とベトナム人くらいだという。



【ホーチミンの街の中】



【上空から見たホーチミン郊外】

■トルコ

2010年2月、トルコを旅行した。パックツアーに参加し夫婦二人の8日間の旅でトルコを時計と反対回りにバスで周遊した。この時期は学生の卒業旅行が多く、このツアーに参加した半分くらいは大学生だった。

トロイ、パムッカレ、カッパドキア、イスタンブールなどトルコ各地をまわった。正直言ってトルコはこんなに素晴らしいところだと思っていなかった。あまり期待していなかった分、衝撃的な感動を覚えた。

私の持論で、感動とは予想や期待と現実の差（ギャップ）だと思っている。それは例えば綺麗な景色を初めて見る人と、何度も見ている人では感動の度合いが違う。期待していなかった場合や偶然に遭遇した場合の感動は大きく、反対に知り尽くしている場合や過度の期待を持った場合には感動は少ない。期待が裏切られた場合には落胆する。これを「偶然と感動、期待と落胆」という言葉にしている。

トルコはまさしく偶然と感動の連続だった。

まず、トロイの木馬で有名なトロイ遺跡に驚いた。この遺跡は古い遺跡が何層にも重なっていて、紀元前3000年頃に始まる第1層の初期青銅器時代から紀元前350年頃のローマ時代の第9層までが積み重なっているという遺跡だ。有名なトロイの木馬が出てくるトロイ戦争は紀元前1200年頃の第7層と推定されているということを現地に行って初めて知った。

使われなくなった街は遺跡として残るが、人々が生活している街はそのまま生き続けるので遺跡にはならない。家でも長い年月住み続けると家に歴史が刻まれる。祖父の時代に増築した場所や父の時代にリフォームした部分などが残って今に至っている。街も同様に侵略され政権が変わった時、建築に新しい技術革新があった時、自然災害が起きた時などに街が生まれ変わる。トロイは3000年以上もそう進化し続けて1600年ほど前に人々がいなくなって進化が止まり遺跡に変わった。



【トロイの木馬 もちろん模造品】

エフェソス遺跡に行った。この遺跡はギリシャ・ローマ時代の都市遺跡の中でも抜群に美しいという。確かにクレテス通りはたくさんの観光客が歩いているので何となく活気があり、昔もこんな光景だったのかと思ってしまう。ハドリアヌス神殿は柱や壁など古代都市の遺跡にしては立派に残っている。少なくともアテネのパルテノン神殿よりは生き生きとしているように見えた。おっとそんなことを書くとパルテノン神殿に申し訳ないか。

周囲の山々を見ると基本的には乾いた土壤の砂漠のような土地なのだが、意外に草や低木といった緑が多い。これもイランのペルセポリス遺跡やエジプトのピラミッドと違うところで、それがこの遺跡に生氣を与えているような気がする。

エフェソス遺跡の中には古代世界三大図書館の一つというセルシウス図書館がある。ついでに三大図書館の残りはトルコのペルガモンとエジプトのアレクサンドリアにある。図書館は知識レベルのバロメーターと言われ、トルコにはそれが2つもあったのだから、かつてのトルコの存在感はあまりにも凄い。

小高い山腹に口を開けているように大きな半円状の劇場がある。劇場は青空によく映えるのでかつてこの劇場で劇や集会が開かれていたことが十分に想像できる。遺跡見物を楽しむコツは当時の様子を想像することだ。



【セルシウス図書館の跡】



【劇場 遠方にクレテス通り】

トロイもエフィソスも海岸沿いにあるが、内陸にあるパムッカレにやって来た。パムッカレは一言でいうと石灰の棚田だ。棚田の中には温泉が満たされているので入ると温かい。長い歳月をかけて温泉に含まれる炭酸カルシウムが堆積してできた石灰棚で、昼間は青い空の色が反射して青白くなり、夕方には茜色に染まる。本当に魅力的な風景だ。

この石灰棚の上にはヒエラポリス遺跡がある。この遺跡はローマ帝国の温泉保養地として栄えたものでローマの劇場や浴場の跡がある。



【パムッカレ石灰棚田】



【温かい棚田に浸かる】

アラブと言えばベリーダンスだ。踊り子は若くて綺麗で少しスレンダーな女性だった。濃艶な踊りなので衣装も濃艶で布の面積は少ない。観客は踊り子のその少ない布と豊満な胸の間に札を入れ込む。日本でも同じようなシーンを見かけるが、ここは本場だ。私もアラブの富豪になった気分で、札をねじ込んだ。

ショーが終わってアトラクションでお客が何人かステージに上げられた。私も指名されたのでベリーダンスの指導を受けたが、これがかなり難しかった。



【ベリーダンスに挑戦】

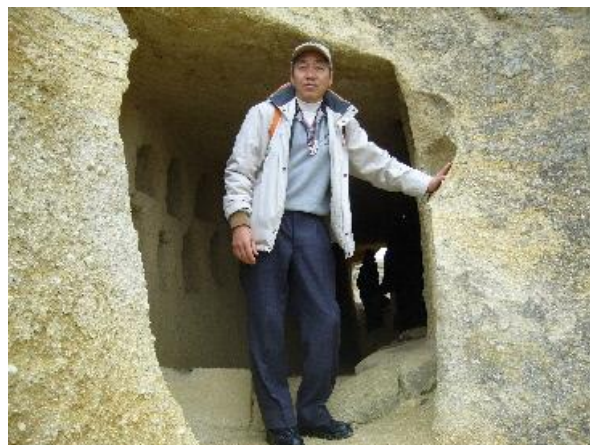
さらにトルコといえば、トルコ風呂だ。かつて日本ではトルコ風呂はいかがわしい風俗営業を意味したが、その名称をやめて欲しいとトルコ人留学生が名称変更を訴えて業界やマスコミを動かしてソープランドに名前が変更された。

本物のトルコ風呂は「ハمام」と呼ばれる蒸し風呂で湯船はない。もちろん私は本場のハمامを体験した。スーパー銭湯大好きな私にとってハمامはいわゆるスチームサウナであり特別な感じはしなかった。

カッパドキアは奇岩群で有名なので、私もそれなりに予備知識があった。それでもあのシメジのような岩の本物を見ると感動をした。あの奇岩の中に実際に入ってみると、意外に快適でこれは住めると感じた。だから今でも住んでいる人がいて、ホテルもある。



【カッパドキアの奇岩】



【奇岩の中】

カッパドキア近くのカイマクルには地下都市の跡がある。地下 8 層もありローマ帝国の迫害を逃れた初期のキリスト教徒たちが隠れ住んだという。何世紀もかけて拡張されてきたというので大きな都市になり最盛期には 2 万人が住んでいたとも言われている。作られた年代は明確ではないが、ローマ帝国のキリスト教公認は 313 年だから、1 世紀から 2 世紀だろう。

イスタンブールは「文明の十字路」と呼ばれている。それはアジアとヨーロッパの境目がイスタンブールで、アレクサンダー大王の東方遠征や十字軍が聖地奪回のためにイスタンブールを通過して東に向かった。ペルシャ帝国がヨーロッパへ進出した時はその逆だった。

それらは東西の流れだが、十字路なので南北の流れもある。黒海とエーゲ海を繋ぐボスポラス海峡が北の強国ロシアがエーゲ海、そして地中海への出入口になっている。イスタンブールはそのボスポラス海峡の両岸にまたがっている街だ。

宗教的にも大変興味深い街で、キリスト教の東ローマ帝国（ビザンティン帝国）、そしてイスラム教のオスマン帝国の首都だった。二大宗教の大帝国の首都を一つの街が経験している。

現在は博物館になっている「アヤ・ソフィア」は、最初ギリシャ正教の総本山だった教会をイスラム教のモスクに改修した。トルコや地中海沿岸の地域ではこのように別の宗教に変更になった施設は多くあるが、その中でもこのアヤ・ソフィアは特に大きい。中に入ろうとしたが閉館時間になっており残念ながら近くから見るだけになった。

そのすぐ近くにイスタンブール観光には外せない「ブルーモスク」と呼ばれている美しいモスクがある。モスクは通常は4本の塔が建物の四方にあるのだが、このブルーモスクは世界で唯一6本の塔を有するというもので、この街がイスラム世界の中心だったことが理解できる。



【ブルーモスク 6本の尖塔が見える】

ブルーモスクの近くに地下宮殿という観光名所がある。実はここは東ローマ帝国時代の貯水槽で、宮殿のような荘厳な雰囲気なのでそう呼ばれている。そこには大理石でできた「メデューサの首」もある。

イスタンブールは昔からそして今もこの地域の文化、宗教、経済の中心になっている。ヨーロッパでもアジアでもなく、時間を超越しての存在感があり、漫画ゴルゴ13や映画007にもよく出てくる。デューク東郷やジェームズボンドはこの街に実によく似合っている。

イスタンブールの最近のグルメと言え
ば鯖サンドで、焼いた塩鯖と野菜にレモン
を絞ってフランスパンで挟んだ B 級グル
メだ。金角湾にかかるガラタ橋の下にある
レストランで食べた鯖サンドは実に美味
かった。塩加減が絶妙なその味は今でも忘
れられない。

私も家に帰ってから私も何度か挑戦し
てみたが、あの味は出せなかった。異国情
緒漂うイスタンブールで食べたからこそ
の味なのだろう。



【鯖サンド】

現在のトルコは、国土の 97%がアジアにあるので括りはアジアの中東地域だが、欧米の軍事同盟の北大西洋条約機構 (NATO) に属しており、さらに以前から EU にも加盟交渉をしているが、宗教はイスラム教だ。国際社会の中では極めて不思議な立ち位置にいる。

そんなトルコは日本との関係は極めて良好な親日国である。明治時代にトルコの軍艦エルトゥールル号が和歌山県沖で遭難したときに地元の住民が救援に駆けつけ、手厚い対応をしたことで一気に親日国になった。日露戦争では日本がロシアのバルチック艦隊を破ったことをトルコでは自国の勝利のように喜んだという。その当時トルコは露土戦争でロシアと戦っていたから敵の敵は味方という理屈だ。

私は高校時代には歴史が苦手なで、それに対して地理が好きだった。そのため地図を見るのが好きになり、旅に出るようになったのかもしれない。

このトルコの旅で私は歴史も好きになったように感じた。それは 9 層に積み重ねられたトロイ遺跡、今も生き生きしている感じのエフェソス遺跡、文明の十字路のイスタンブールなどが私に衝撃を与えたからだ。

言うまでもなく歴史とは過去の出来事の流れのことで、その結果が積み重なって現在に至って地理になる。ということは歴史の流れのある時点を、そこで切るとその断面がその時点の地理ということになる。そんなことは識者の間では言われていることなのだが、私はそれをトルコ旅行で実際に体験して理解した。いわゆる腑に落ちるというやつだ。

遺跡や旧跡を巡る旅は、その時に繁栄していたその土地を旅することを意味している。これは歴史を勉強しないといけないと改めて感じる旅になった。

■中央ヨーロッパ 5 カ国

2012 年 9 月、夫婦で中央ヨーロッパ 5 カ国を 7 日間で巡るパックスツアーに参加した。

5 カ国とはオーストリア、チェコ、ドイツ、スロバキア、ハンガリー、主に旧共産圏の国で、それは私にとっては初体験になる。

オーストリアの首都ウィーンにあるシェーンブルン宮殿は、有名なハプスブルク家の宮殿だ。宮殿は幅約 175m、奥行き約 55m のバロック様式で、1441 室の部屋があるという。ここにはあのマリーアントワネットが住んでいた。宮殿の鏡の間でモーツァルトが演奏をして退出するときに転んでしまって、これを幼いマリーアントワネットが助け起こしたら、モーツァルトが「あなたをお嫁さんにしてあげる」と言った話もあるが、これは当時の身分の差から無理な話だろう。

私たちは宮殿内には入らずに庭園を散策した。もちろんフランス式庭園で東西約 1.2km、南北約 1km もあって、広くそして素晴らしかった。

ヨーロッパ各地を旅行すると必ずハプスブルグ家のことが出てくるが、この庭園を散策するだけでその存在感を充分に感じることができた。もちろん宮殿と庭園は世界遺産に登録されている。



【中央奥がシェーンブルン宮殿 手前は全て庭園】

ウィーンは素晴らしい街だ。近代的な国際都市という雰囲気もありながら古い教会や宮殿が見事に調和して存在していた。音楽の街で、街を歩くとあちこちで一人あるいは数人の音楽家たちが演奏していた。音楽は完全に生活の一部になっている。このツアーで本場の音楽を聴くために夜の音楽会に連れて行ってもらった。残念ながら撮影禁止だったので写真は残っていないが、私の脳裏には演奏とその光景が鮮明に残っている。

ウィーンほど多くの著名な音楽家が活動した街は世界的にもあまり類を見ない。モーツァルト、ヨハン・シュトラウス、ベートーベン、ハイドン、ブラームス、シューベルトと切りがない。住んでいた家、記念碑などが街の至るところにある。どうしてこんなに多くの音楽家が活躍できたかという、それはやはりハプスブルク家だ。その後ろ盾があったからこそのことだ。

音楽、絵画などの芸術は、生活の潤いには必要だが、人間が生きていく上では必ずしも必要ではない。そのため芸術家が勉強や活動に専念できるように後ろ盾はいつの時代でも必要だ。

ヨーロッパの南の方のイタリアやスペインでは芸術というと絵画や彫刻が主で、北の方のオーストリアやドイツでは音楽が主になっている。このような棲み分けは偶然かもしれないが、私の推理ではローマ帝国の影響か、ハプスブルク家の影響かによるところだろう。

この地方の名物料理「シュニツェル」を食べた。これは子牛の肉をたたいて伸ばし、小麦粉・卵・パン粉をつけて炒め揚げたもので、肉は牛肉だけでなく鶏肉、豚肉も使われる。この豚肉バージョンが日本のトンカツになった。味は塩味でなかなかいける。

実はこのシュニツェルが、日本人の工夫で私が愛してやまない「ソースカツ丼」に進化した。この話は長くなるので別途にしよう。



【オーストリアの名物料理シュニツェル】

ヨーロッパで訪れなければならない綺麗な街が二つあると言われている。一つがクロアチアの海洋都市だったドブログニクで「アドリア海の真珠」と呼ばれている。そしてもう一つがチェコのボヘミア地方の小さな街、チェスキークルムロフだ。こちらは「眠れる森の美女」と呼ばれている。街全体が世界遺産に登録されている。

チェスキークルムロフはボヘミアの深い森に守られて、中世から姿を変えることなく現代に至っている。街並みはまるで花束のようで、屋根のオレンジ、壁の白、緑の木々、そして色とりどりの花が咲いている。ブルタバ川が大きく蛇行してオーム「Ω」の文字のように川が流れており、その中に街がある。この街は綺麗なことはもちろん、私はこのサイズ感が好きになった。小さな街なのに大きなクルムロフ城と聖ビートス教会があって、その塔に登れば街を一望できる。まさしく手のひらに乗るという感じがする。それまでもその後も私は世界各地の街を見て歩いているが、この街はピカイチだろう。



【チェスキークルムロフの街】

チェコの首都プラハに行った。有名なカレル橋はモルダウ川に架かるプラハ最古の橋で 1357 年から 60 年近くかけて完成したという。全長約 520m、幅は約 10m、両方の欄干には聖人の像が 30 体並んで美術館のようになっている。その中間あたりに日本人なら名前だけは誰でも知っているフランシスコ・ザビエルの像があり、足元には彼を支える日本人と思わしき像がある。ところがどう見ても日本人には見えない。それは日本人を見たことない人たちが想像だけで作ったからで、当時の日本人の特徴のチョンマゲだけは結っている。

橋の上には絵描き、大道芸人、露天商などがずらりと並んでいて、たくさんの人々で賑わっていた。カレル橋の上でも、そして橋から続く旧市街の広場を歩いても、至るところでアコースティックな音楽が聴こえてきた。もちろんクラシック音楽中心の生演奏だが、音楽が完全に人々の生活に根付いていることが肌で感じる事ができた。



【カレル橋】

チェコにあるレドニツェ城とヴァルチツェ城に立ち寄った。2 つの城はリヒテンシュタイン家が所有していたという。現在のリヒテンシュタイン公国はスイスとオーストリアの間にあって、ここからかなり離れている場所にある。かつてリヒテンシュタイン家はハプスブルク家の家系で大きな領土を持っていた。主権独立国家となって第二次世界大戦では中立を保ち戦禍から逃れたが戦前戦後で領地は没収されたという。

チェコは旧共産圏だったためなのか、あまり観光開発されなかった。それは商業主義に毒されていないので私たち旅行者にはありがたい。私はこの後の旅行でも旧共産圏に行くことが多くなるが、それは共通して言えることだ。

ドイツのドレスデンに行った。この街は旧東ドイツ地域でチェコとの国境に近い。国際河川エルベ川の沿岸にあり、いかにもドイツという雰囲気のある重厚な建造物が多くある。私にとっては初めてのドイツ訪問になりドイツの凄さに相当に驚いた。ドレスデンは「百塔の町」とも呼ばれるほど塔が多い。

ドレスデンが最も発展したのは 1700 年代前半で、ドレスデンを代表する建築物のツヴィンガー宮殿、聖母教会などが建築され、1806 年に成立したザクセン王国の首都になった。その後ドイツの州になって第二次世界大戦では徹底した爆撃によって市内中心部はほぼ廃墟と化した。戦後は東ドイツ領となり、本格的な再建は 1990 年の東西ドイツ統一後で、瓦礫の堆積のままの状態に放置されていた聖母教会の再建は「ヨーロッパ最大のジグソーパズル」と言われた。廃墟だった時の写真が展示されていたが、これを再建したのかと驚きの限りだった。

この街は 2004 年に世界遺産に登録された。ドレスデンの街並みとエルベ川の渓谷が織り成す美しい景観が登録の理由だ。ところが 2009 年に登録を取消された。その理由はエルベ川の美しい渓谷に橋を建設したためだが、橋の建設は世界遺産登録前に決まっていた。橋は住民の生活にとっては必要不可欠なので世界遺産よりも住民の利便性を優先させた。

私はこの一件で日本人とドイツ人の思考基準の違いを感じた。日本人はなぜか世界遺産の登録を切望し登録されれば大変喜ぶ。それは異常というレベルかもしれない。ところがドイツはその世界遺産を捨てた。世界遺産という名よりも住民の生活という実を取った。



【ツヴィンガー宮殿の中庭】



【ドレスデン城の外壁「君主の行列」】

このことと直接的には関係ないかもしれないが、人々の生活を守るというドイツのポリシーに私は驚いたことがある。

ドイツのレストランではメニューにビールのサイズが 0.5L とか 0.35L とか明記されており、ビールのグラスには必ず目盛がついている。泡を除いてこの目盛より必ず上にくるようにビールが注がれて出てくる。それが法律になっているというから驚きだ。対して日本では生ビールの中ジョッキを注文すると店によってジョッキのサイズはまちまち、店員よって注がれる量も違う。

この曖昧さがドイツにはない。ドイツ国民の生活を守るために法律がある。そしてそれは回りまわってビールというドイツの文化を守ることに通じている。

スロバキアの首都のブラチスラバに立ち寄った。昔はチェコ・スロバキアという国があったが 1993 年にチェコとスロバキアに分かれた。この旅ではこの両方の国に行ったが、明らかにチェコの方が裕福で国力も活気もあった。スロバキアは田舎という印象しか残っていない。

ハンガリーの首都ブダペストはドナウ川沿いにある。ブダペストはこの地域での最も存在感があって政治、文化、産業、交通の中心都市になっている。ドナウ川を挟んで西岸がブダ、東岸がペストということで、長らくは別の街だったことを現地に行って初めて知った。

ブダペストはヨーロッパで最も美しい街の一つで、ドナウ川河岸を含め世界遺産が広がりブダ城や国会議事堂などが沿岸にある。この夜景が実に素晴らしかった。

夜景というと函館や神戸のように山の上から都市の灯りを見るのが一般的なので、正確には夜景とは言えないかもしれないが、建築物がライトアップされた夜の景色になる。私が見てきた同類の景色の中ではおそらく世界で一番だろう。



【ドナウ川沿いの国会議事堂】

ブダペストの歴史はほぼハンガリーの歴史で、これがやはり波乱万丈の歴史だ。

始まりはローマ帝国の時代で、9世紀頃にはハンガリー王国が成立した。しかし13世紀にモンゴルの襲来により破壊され略奪された。日本でもその約30年後に元寇つまりモンゴルの来襲があった。当時の世界はアメリカ大陸発見前で、東端の日本とヨーロッパの真ん中まで攻めてくるのだから世界のほとんどをモンゴルは支配しようとした。

15世紀に街が再建されたが、今度はオスマン帝国に150年間も支配されてイスラム教への改宗が進んだ。その後はオスマン帝国の支配から脱却したが、次はハプスブルク家に支配され、オーストリア＝ハンガリー帝国に組み込まれた。

第一次世界大戦の敗戦で、オーストリア＝ハンガリー帝国は解体されハンガリー王国として独立した。続く第二次世界大戦ではハンガリーは枢軸国陣営として参戦した。つまり日独伊三国同盟側についた。ドイツの息がかかったこの地域ではそういう国が多い。そして戦後はソビエト連邦の影響下で共産主義政権が成立した。

ソビエト連邦崩壊によって民主主義政権になり NATO（北大西洋条約機構）に参加、EUにも加わった。

ハンガリーのトカイ地方にトカイワインという有名でちょっと変わったワインがある。貴腐菌というカビに侵された白ブドウで造られるので貴腐ワインとも呼ばれている。

このトカイワインが生まれたのは17世紀で、誕生の秘話が面白い。トカイ地方がオスマン帝国の侵略を受けて住民たちはこの地から避難せざるを得なくなった。そして村を離れている間にブドウの収穫期が過ぎてしまい、霧によって収穫されずに残っていたブドウの実にカビが付いて腐り始めていた。住民たちは諦めきれずそのブドウでワインを作ったところ、濃厚で甘い蜜のようなワインになったことが始まりと言われている。

確かにこのトカイワインは濃厚で甘くて美味しい。日本では滅多に手に入らない。同じツアーの家族連れがこのワインを大量に買っていた。家族の免税枠いっぱいまで買い込んでスーツケースはワインばかりだと言っていた。それ用に梱包材まで持参してきたというから極めて計画的だ。

この旅でかつてはハプスブルク家の影響、近年はドイツの影響により複雑な歴史と勢力の推移、その文化、芸術、ワインなど実に興味深かった。また一つ私の世界観が変わった。

第四章 50代の国内旅行

■バリエーションが増えた50代の旅

50代になっての旅行は、海外旅行においては完全に夫婦二人だけの旅になったが、国内旅行は少し事情が違い、夫婦二人以外のバリエーションが増えた。

温泉の旅は相変わらず続けていたが、会社の保養所も時代の変化でその数が減って、行く機会が大幅に減少した。そしてキャンプは年一回の極寒キャンプ以外ほとんど行かなくなった。

代わりにゴルフ旅行、歩き旅をするようになっていく。どちらも体を動かし健康的な旅なので50代という年齢をいかにも象徴している。特に歩き旅は財布にも優しく大きな広がりを見せた。

■北海道ゴルフ旅行

現在でも私が幹事をしている同期入社組で行く温泉一泊のゴルフ旅行は50才手前から始まった。2004年那須チサンカントリーでプレーし、那須の保養所に泊まった記録が残っている。それ以降ほぼ毎年実施している。

2006年1月、その中でも特にゴルフ好きの4人でさらにゴルフに特化した旅行を始めた。

その第一回は宮崎で、宮崎カントリークラブ、青島ゴルフ倶楽部でプレーした。この時に女子プロゴルファー大山志保の父親の個人タクシーをチャーターした。これは偶然ではなくゴルフ仲間から紹介されたて、前もって指名し予約していた。

以降ほぼ毎年、同じメンバーで1泊2日2ラウンドのゴルフ旅行に北海道を中心に行くようになった。そのため北海道のゴルフ場では相当な回数ラウンドした。キタキツネやリスが現れることもしばしばあり、プレー以外でも北海道を感じるが多かった。

北海道のゴルフ場は北海道外のゴルファー向けのゴルフ場と、地元のゴルファー向けのゴルフ場に大別される。最初はそれを知らずに色々なところに行っていたが、回数を重ねてそれが分かってきて前者の中で「ニドム・クラシック」は外せないゴルフ場になった。



【ニドム・クラシックのキタキツネ】

このゴルフ旅行はゴルフだけではなく、北海道ならではの新鮮で美味しい食べ物を堪能した。何しろ当時メンバーは50代、世の中のグルメをひととおり堪能した年代だ。さらに4人のうち2人が会社の社長をしており、そういう立場なので舌も肥えていて金回りもいい。

北海道といえば、まずはカニだろう。タラバガニは鱈の漁場で獲れるからタラバガニで、鱈は魚へんに雪と書くので水温が低い北海道近海でしか獲れない。しかしながら実はヤドカリの仲間で正確にはカニではない。そう差別するつもりはないが、味はやや大味で、私としては同じ北海道のカニならば毛ガニが一番だと思っている。

最近流通の進歩によって北海道に行かなくても食べることができるが、どちらのカニも北海道で食べた方が美味しい、そして安い。



【タラバガニ 毛ガニ】

北海道に行かなければ食べられないものはシシャモだろう。ただし私たちがスーパーマーケットでよく見かけるシシャモと思っている魚は正式にはカペリンという魚でシシャモではない。カペリンは北極海を中心に多くの地域で回遊するので漁獲量が多く、そのため安い。寒い地域で回遊してシシャモに似ているのでカラフトシシャモなどと呼ばれることもある。カペリンと区別するため北海道の本物のシシャモは本シシャモと呼ばれることがある。本シシャモは焼いて食べるのもいいが、実は北海道では季節を選べば刺身で食べることもできる。苫小牧の近くの鶴川（むかわ）町が産地になっている。

ハッカクという魚も食べた。深海魚で大きなヒレを付けており見た目はグロテスクで、八角形のような形からハッカクと呼ばれている。北海道でも小樽近海でしか獲れない高級魚で、脂がのっていて濃厚な旨味がぎゅっと詰まった白身魚で、もちろん美味しい。深海魚なので一年中食べることができるが、漁獲量が少ないので地元でもなかなかお目にかかれない。本州ではまず食べることはできない。

旅は現地に行かないと食べることができない逸品にありつける。そしてゴルフはある意味、金持ちのスポーツなので、その仲間と行くゴルフ旅行は私のような貧乏旅行が多い人間にとっては全く違う経験をさせてくれる。

■歩き旅

2009年の春、私が53歳の時に災害時の帰宅という観点から、勤務していた茅ヶ崎の事業所から自宅までの約18kmを歩いて帰宅した。最初は無理かもしれないと思って歩いたが、これが意外にも簡単に歩いてしまった。むしろ簡単すぎて拍子抜けしたくらいだ。これに私は自信を持ち、長距離ウォーキングを始めるようになった。

2009年10月、箱根の塔ノ沢から藤沢までの長距離を友人と歩いた。友人は九州から茅ヶ崎の事業所に長期応援に来ていて、その彼が九州へ戻ることになったので、記念に何かしようということになり長距離ウォーキングをすることになった。

場所は関東だからこそ歩ける箱根駅伝のコースを選び、42.195kmを目指した。それはフルマラソンの距離でこの数字42195を「死に行く覚悟」と読み、覚悟をもって臨んで何とか完歩することができた。



【塔ノ沢から藤沢の途中の休憩風景】

翌月も同じ友人と今度は東京から藤沢まで箱根駅伝のコース42.195kmを歩いた。

その友人が九州へ戻り、以降は妻や別の友人たちと日帰り長距離ウォーキングをこなしていった。東京都内観光ウォーキング、山手線一周、三浦半島半周など、いつの頃からかウォーキングというよりも“歩き旅”という言い方がフィットするようになっていった。

2010年3月、宿泊を伴う歩き旅が始まる。妻と一緒に自宅から歩いて寒川神社を經由して湘南海岸まで行き、茅ヶ崎の保養所で一泊した。初日は距離約20kmを歩き、翌日は鎌倉まで約15kmを歩いて電車で帰宅した。

2010年5月、群馬県桐生市の実家から神奈川県座間市まで私一人で歩いた。実はこれが私の歩き旅の中で最も辛いものになった。

距離は約120kmで、途中で川越のビジネスホテルに泊まった。初日70km、翌日50kmで途中棄権を何度か考えたほど苦しかった。その最大の敗因は靴で、靴底が薄いのがいけなかった。当時の私は靴についてそれほど気にかけていなかった。たまたま運よく適度な靴で歩いていたのでそれに気が付かなかっただけだった。歩き旅において靴は命と言ってもいいほど重要で、靴の良し悪しで歩き旅は全く違ってくることを痛感した。

2011年5月、夫婦で京都に行った。往復は新幹線を使い2泊3日で京都を歩いた。初日は大原の三千院から四条河原町まで歩いた。2日目は宇治平等院から四条河原町まで歩いた。3日目は嵯峨野周辺を散策し京都駅まで歩いた。3日間の総歩数は約10万歩、約70km歩いた。宿は大阪と京都の保養所に泊まった。

2011年6月、旅友で飲み友の鎌仲と伊豆大島一周の歩き旅を実行した。金曜日の夜に大型客船に乗って船中泊して朝6時に伊豆大島に着いた。直ぐに歩いたが、あいにくの大雨で結構辛かった。それでも午後は雨があがってなんとか約40km歩いて宿に着いた。

船には釣り客以外にサイクリングやトライアスロンをする人たちも多く乗っていて活気があった。宿ではクサヤをはじめ料理も美味しかったので、私はこの島が気に入って今度は妻を連れて来たいと思った。

2011年7月、富士山に登った。会社の後輩たちと木曜日の夜に須坂口の五合目まで車で行き、そこから夜を徹して登ったが、残念ながら雲で御来光を見ることはできなかった。それでも無事に登頂し、お鉢回りもした。下山して金曜日の夜に箱根の温泉宿で一泊した。

私にとっては歩き旅の延長という気分で登ったが、一緒に登ったメンバーの中では私が一番の年上の55才だった。しかし一番元気だった。他の40代の連中は相当辛そうだった。私も40代の頃は仕事ばかりで運動不足だったから無理もない。



【富士山頂】

実はこの富士登山の予行演習のために1カ月前に金太郎で有名な足柄の金時山にも登っていた。標高1212mの金時山は意外に急峻で、この予行演習も有効だったのだろう。

また、この頃の私は会社まで長距離を歩いて通っており、毎日2万歩を歩いていた。

2014年1月に箱根駅伝第1区を家族で歩いた。箱根駅伝は東京から箱根芦ノ湖まで往復合計10区間で217.1kmになる。1区間は約22kmなので一日に歩く距離としてはちょうど良い。

この距離を自分たちの都合の良い日を選んで家族で歩いた。各区間のスタート地点までは電車を利用して行き、その区間のゴール地点でその日は終了ということで帰宅した。第5区、第6区は箱根の山上がりと山下りなので箱根の温泉宿で泊まる1泊2日の旅になった。最後の第10区を2015年11月に歩きゴールした。およそ2年かけて完結したこの旅は「箱根駅伝歩き旅2015」として旅行記を公開している。

このような鉄道やバスを使って目的地まで行って歩き旅をしてまた戻るといった歩き旅を、私は「レール&ウォーキング」と呼んでいる。

■日本にある世界遺産の旅

2011年8月、世界遺産巡りの旅と称して、新しく買ったトヨタの「ベルタ」で西日本を妻と自動車旅行をした。当時はまだ行ったことのない日本にある世界遺産がいくつかあって、この自動車旅行で一気に行ってしまうと10日間の旅に出た。

白川郷、高野山、石見銀山、一気に鹿児島まで南下し鹿児島港から屋久島に渡った。帰路に福岡の友人宅、大分で友人の別荘に宿泊し、門司港から夜間フェリーに乗り大阪経由で帰宅した。

私は旅行記の中で「偶然と感動、期待と落胆」という言葉をよく使っている。過度に期待するとそれが外れた時に落胆するが、反対に偶然に遭遇したものに感動が多いというものだ。この時の旅はまさしくそれを感じる旅になった。

島根県の岩見銀山には予備知識も下調べも全くせずに行った。先入観も期待もなかったため偶然が重なり感動したが、石見銀山そのものが世界遺産としての質が高かったことが幸いした。石見銀山に行って、ユネスコが目指す世界遺産の意義「人類共通の財産を守り次世代に残していく」を初めて理解できた。これだけ旅行していた私が 55 才にして初めてとは情けない話だが、世界遺産＝観光資産と思い違いしており、過度の期待があったのかもしれない。これを払拭しない限りどの世界遺産でも落胆が多くなる。

石見銀山の世界遺産は 14 の資産で構成されており、「銀鉾山跡と鉾山町」、「街道」、「港と港町」の 3 つの分野に分類される。銀鉾山跡と鉾山町は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から製錬まで行われた鉾山跡と人々の居住地区、これらを軍事的に守った山城跡から成っている。この鉾山跡と居住地区だけを世界遺産と思っている人が多い。ところが石見銀山の世界遺産には、銀を積み出した港とその作業する人々の居住地区も登録されており、さらに銀鉾山と港との間を結ぶ 2 本の街道も含まれている。言わば銀を産出し輸出するシステム全体が登録されている。

なぜシステム全体なのかというと、戦国時代から江戸時代にかけて約 100 年間に大量の銀が採掘され海外にも多く輸出されていた。当時の日本の銀の産出量は世界の約 1/3 を占めており石見銀山はその中核だった。世界の産業や文化にかなりの影響を与える石見銀山の存在意義は大きかった。銀を掘って、運んで、船で送り出す、それを生業に人々が集まって生活をしたその姿が現在も残っているからシステム全体が登録された。これに私は納得し感激した。

それゆえ現在も人が住んでいる居住区では街の雰囲気を壊さないように喫茶店や銀行、郵便局までもが景観を配慮した建物になっている。私はそれらの建物を見て相当感激した。



【居住区の喫茶店 営業中】



【居住区の山陰合同銀行 営業中】

その後に行った屋久島も素晴らしかった。

島内で旅館に 3 泊し、その滞在中に有名な縄文杉、白谷雲水峡を訪れ、島内一周ドライブを楽しんだ。

しかし私は有名な縄文杉を見てもさして感動はなかった。決してつまらないと言う気はないが、古い枯れかけた杉を見たというだけだった。この杉の樹齢が 4000 年とも言われているのでそれを考えると凄いのだが、私は期待し過ぎたようだった。これも期待と落胆かもしれない。

今考えると縄文杉そのものよりも、そこに行くための道程が良かった。標高差約 700m の山道を延々と約 11km 歩き、トロッコ列車の軌道、豊富な水、緑の木々、虫や動物、屋久島の山々といったものを肌で感じる事ができた。縄文杉を目的にするのではなく、“縄文杉トレッキング”を目的だと考えると、これはお勧めだろう。

白谷雲水峡はとても思い出に残った。この雲水峡の中にある“苔むす森”という場所が映画「もののけ姫」の舞台のモデルになったと言われている。映画で見たあの光景と同じものを見ることができる。実際に森の中に立って、水と苔と木々といった独特の空気感を感じて実に気持ち良い。この空気感は映画では味わえない。

島一周ドライブをしていると至るところで猿と鹿に遭遇した。島内には人間が2万人、猿が2万匹、鹿が2万頭と言われていた。実際にはピークの時でも人はそんなにいないが、猿と鹿はもつというような気がした。



【縄文杉に行く途中のトロッコの軌道と鹿】



【千寿の滝】

残念だったのは屋久島の最高峰で九州全体でも最高峰の宮之浦岳（標高 1936m）に登らなかったことだ。本格的な登山になるのでハードルが高かった。次に屋久島訪問があるとなれば宮之浦岳は絶対に登ってみたい。

3日間泊まった宿「鶴屋」が良かった。子育て世代がやっている宿で、赤ちゃんも含め一家総出の親身な対応が実に良かった。

料理は屋久島料理と称して毎日違う料理が出てきた。当然地元で獲れた新鮮な魚介類が中心で、その料理に地元の焼酎が実に良く合い、抜群に旨かった。

最近調べたら近くに食肉加工処理場ができたので、今は鹿肉などのジビエ料理も出てくるようだ。

■先取初詣始まる

歩き旅の延長とも言うべき“先取初詣”を2011年12月30日から始めた。私は55才になっており、これも旅友、飲み友の鎌仲と始めた。

初詣とはしているが、実際には12月30日なので“先取（さきどり）”である。大晦日の前日にはほとんどの神社仏閣では正月の準備ができており謹賀新年の看板も出ている。しかし参拝客はほとんどいない。有名な神社仏閣は大晦日から混み始め正月を迎えると身動きも取れないほどに混雑するが、この日はガラガラで空いている。

その第一回目は、東京の有名寺社巡りをするために始発電車で浅草に行って浅草寺を皮切りに寛永寺、神田明神、湯島天神、靖国神社、目黒不動などを歩いて巡って最後は川崎大師まで歩いた。それまでも何回も長距離日帰り歩き旅をしていたので、42.195kmを意識してコースを設定した。

2012 年は鎌倉 48 カ所寺社巡り、この時は大雨で途中断念した。賽銭に苦労した。

2013 年は我孫子から成田山新勝寺まで、利根川の堤防や印旛沼を歩いた。

2014 年は再び鎌倉 48 カ所に挑戦し、リベンジを果たした。

2015 年は東京から大宮の氷川神社まで歩いた。

以降は大山阿夫利神社、秩父神社、三峰神社、江の島神社、秦野の出雲大社相模分祠、現在まで毎年続いている。



【神田明神 12月30日朝】

過酷だったのは標高 1252m 大山の山頂にある阿夫利神社だ。茅ヶ崎駅から湘南海岸の標高 0m に出て相模の国の一宮の寒川神社を参拝し、大山の登山口に着いたときは既に 30km も歩いていた。そこから標高差 1000m を登って頂上の阿夫利神社本社を参拝した。

私の歩き旅、いやこの時は半分登山だが、その中でも 1 位 2 位を争う過酷な旅で、苦痛は太ももからふくらはぎにきた。下山時には痛くて足が動かなかったことを思い出す。

■年末年始は温泉

初めての先取初詣の翌日の 2011 年 12 月 31 日、家族で正月を温泉で過ごすために草津温泉と四万温泉に行った。それからほぼ毎年、年越し温泉旅行が家族の恒例行事になっている。

多く利用したのは草津の人気宿「草津ホテル」で、この宿は片岡鶴太郎の常宿で正月はその当人が初釜でお茶をたててくれる。この宿は普段でも予約が難しいが正月は特に難しい。正月の宿泊を終えて帰るときに来年もよろしくと 1 年前から頼むのが通例だ。

ある年にそのお願いをするのを忘れて 5 月頃に年末の予約をしようとしたら既に満室だった。それでも何とかならないかと相談したら、9 月か 10 月に大手旅行会社から草津ホテル提供分の部屋の予約がオープンになるから、そこでの予約を勧められた。一般的にホテルや旅館は全ての部屋を自分たちで販売せずに別枠で大手旅行会社用に確保している。大手旅行会社の年末年始の宿泊予約は 9 月か 10 月になることが多い。私は当時勤めていた会社の中にあつた旅行会社に頼んで、その確保をお願いした。

9 月になって連絡があつて「部屋は確保できましたが、植木さんから聞いていた料金の 2 倍以上しますよ」ということだった。私は「部屋や料理が違うのではないですか」と聞くと、「それも宿に直接確認したのですが、宿では全く同じ部屋で同じ料理ということでした。どうされますか？」と言ってきた。私は「今回は諦めます」と答えて電話を切った。

例年正月でも私は 2 万円以下で泊まっていたが、4 万円くらいの値段を言われた。確かに人気宿なので正月ならば当たり前かもしれない。しかし同じ内容だと聞いて私の変なプライドがそれを許さなかった。

それはまた草津ホテルの良心を見ることにもなった。正月は稼ぎ時なのでかなり高い正月料金を設定する宿も多い中、草津ホテルはあまり高くしていなかった。大手旅行会社はそのあたりのビジネス感覚に長けているのでかなり高い正月価格に設定したのだろう。

この裏事情を知らなければ、あるいは知っていてもどうしても泊まりたい人は高くても泊まるだろう。これは需要と供給で価格が決まる自由経済の原則だから仕方ない。

以降は草津温泉の別の宿、伊豆熱川、万座温泉などに毎年行っている。

■関東八十八カ所霊場巡り

2013年という年は私たち夫婦にとっては特別な年になった。義父と母、そして妻の叔父が相次いで亡くなった年で、3人とも享年88才だった。

母の四十九日法要の時に本堂に貼ってあった「関東八十八カ所霊場巡り」のポスターを偶然見て、四国ではなく関東にも巡礼の旅があることを知った。私の家は真言宗で、開祖の弘法大師空海は四国のお遍路を始めた人だ。ポスターを見ながら妻と相談した結果、3人の供養を兼ねて関東の88カ所を巡ることにした。

私も妻も群馬県出身の神奈川県在住なので関東地方といっても茨城県や千葉県はやや疎遠だった。関東をくまなく巡るので、その疎遠の地を見る良い機会になるという側面もあった。

2013年9月からこの旅を開始した。始めた時の私の年齢は57才だったが、結願したのは定年退職後で61才になっていた。この旅は旅行記「東国お遍路の旅 2013～2017」に残している。

第五章 新たな始動に向けて

■最後の勝負

50代も中盤になると60才の定年退職を見据えて人生計画を考えることも多くなる。私はあまり真剣に考えたことがなかったが、その私が大きな衝撃を受けることがあった。ただこの件は旅行とは直接関係しない。

確か54才の時だったと思う。久しぶりに大学時代に一緒に日本一周した大川と会って酒を酌み交わした。最初は他愛のない話が続いたが、彼がふと発した言葉は「男は50代前半で人生の最後の勝負をかけるべきだ」と言った。私は「そうかもしれないね、それで大川は何をやるの?」と聞き返した。彼はすかさず「家を建てる」と答えた。

私は驚いて聞き直すと「ハンドメイドで家を建てる」、つまり家を自作すると言った。

そして彼は淡々と話し始めた。「ハンドメイドといってもゼロから全てを素人が作るのではなく、ハーフビルドという方法があって、難しい箇所や家全体の強度に影響しそうなところ、例えば水回りや土台はプロの職人と一緒に作って、残りは自分で作るというもので、もう準備に入っている」と言っていた。

2010年、建設途中の家を見せてもらった。まだ住める状態ではなかったが、週末には泊まり込んで作業をしていると言っていた。

その約1年後の2011年の冬、一部分は未完成だったが住める状態になったので招待を受けて夫婦で泊まりに行った。どこを見ても素人が作った家にはとても見えなかった。

その訪問に冬の寒い時期を選んだ理由は薪ストーブだった。実は彼が家を自分で建てたいと思ったきっかけは薪ストーブで、自分のこだわりを入れて薪ストーブを中心にした家を建てることだった。

そのこだわりは随所にあった。「この加工には苦勞した」とか、「このレンガはブルガリアから輸入したので大変でしかも高かった」とか、半分文句を言いながらも実は自慢したくてしょうがないというのが見え見えだった。彼の説明は説得力があり、そして興味深かった。その時の彼はまるで少年のような眼差しをしていた。

そのこだわりの薪ストーブに火を入れて、グラスを傾けて彼との旅や人生を振り返った。もちろん奥方たちも一緒だ。その時で私たちの付き合いはもう35年になっていた。



【建設途中の大川邸 2010年】



【薪ストーブ 2011年】

この大川の“家作り”が、私に大きな刺激を与えたのは言うまでもない。私もそろそろ最後の勝負に出ないといけないと日々考えるようになった。定年退職まであと5年の55歳の時だった。

■伊豆大島ペンションすばる

2013年5月、私が57歳の時に再び伊豆大島に渡った。その2年前に伊豆大島一周の歩き旅で伊豆大島が気に入って今度は妻を連れて来たいと思っていたので妻と二人で訪れた。レンタカーを借りて島内観光をし、島内で人気ナンバーワンの「ペンションすばる」に泊まった。この時がペンションすばるとの初めての出会いで、ペンションのオーナー夫妻とは意気投合して話に花が咲いた。

9月には娘と息子も連れて家族で訪問、さらに11月には花壇の天地返しと花植え、翌年2月は椿の花びらジャム作りの手伝いに訪れた。

オーナーはかつてサラリーマンのエンジニアで、55才で定年退職してペンションを開いた。15年が過ぎてペンションも軌道に乗り、残りの人生をかけて最後にもう一仕事を考えていた。

何かで成功をおさめた人間はさらに高見を目指すもので、常に夢を持ち続けてその夢の実現に向けて行動する。松下幸之助も同様に当時の日本は経済一流、政治三流と言われていて日本の政治を憂いで、さらなる社会貢献という夢のために松下政経塾を開いたのは86才の時だった。

人間はいくつになっても夢を持つことが重要だ。しかしこのオーナーの場合は次の夢の実現のためにはペンションを誰かに引き継がないといけない。当時の私は定年退職まであと3年という年齢で、私もそのこと、つまりペンション経営について真剣に考えた。

もちろん妻とも相談した。しかしなかなか結論が出なかった。経済的なこと、同居している高齢の母のこと、実際のペンション運営の難しさなど多くの課題が見つかる。それに対しての対策も見つかる。だからやろうと思えばできたが、しかしそれでも一歩踏み出せない何かがあった。

私はそれを考えるにあたり、「最終的に自分のやりたいことは一体何だろうか？」と自問自答を何度も繰り返した。そして自分の人生を振り返った。気が付いたことは、旅人を迎え入れることよりも自ら旅に出て旅の魅力を広めていくことだった。

そして旅のチカラ研究所設立に向かうことになるが、ペンションすばるとの出会いは私にそのことを真剣に考える貴重な機会になった。

「自分のやりたいことは何か」、この言葉は今でも私は自分自身に投げかけることが多い。そして定年退職を迎える友人や後輩たちが相談に来るとその言葉を投げかけている。